ごとくふきたてたれば、すべて目も見えず、おびたゞしくなりとよむ音に、物いふ聲も聞えず、彼地獄の業風なりとも、かばかりにこそはとぞ覺ゆる、家の損亡するのみならず、是をとりつくろふ間に、身をそこなひて、かたわづけるもの數を去らず、此風ひつじさるの方に移り行て、多くの人の歎をなせり、辻風は常に吹ものなれど、かゝる事やはある、只事にあらず、さるべき物のさとしかなとぞ疑ひ侍りし。

〔慶長見聞集五〕土風に江戸町さはぐ事

見しは昔、江戸に土風たえず吹たり、されば龍吟ずれば雲おこり、虎うそぶけば風さわぐ、かゝるためしの候ひしに、江戸に土風吹は町さわがしかりけり、此風を他國にては旋風といふ、此字めぐる風と讀たり、又つむじの毛のごとく、土をまひて吹ければ、つむじ風共俗にいふ、〇略中扨又此風、土をうがつ故にや、關東にては土くじりといふ、萬葉に六月の土さへさけて照日と讀り、土くる共あり、土くじりとはおかしき名なり、取分江戸近邊に吹風也、〇略中藻鹽草に、風の異名さまざま記せり、若此内に土くじりと云風や有とよみて見れば、つじといふ風の名あり、是は谷の河風なりと注せる、かなに書て正字しれず、〇略中嵐の異名また多し、此内にも土くじりといふ風はなし、然に江戸あたりに吹土くじりといふ風は、雪の氣色もなく音もせずして、俄に地より吹立、土をまきつゝんで空へ吹上れば、たゞくろけむりのごとし、皆人是を見て、すは火事こそ出來たれ、やけ立烟を見よとさはぎてんたうする、町の御掟の事なれば、家々より手桶に水を入、引さげ引さげ持行事は、先立てはたじるしを持、火本は爰やかしこ、はしりまはる内に、土けぶりはきえて、そらごとなりといへば、さげたる桶の手持もなく、はたをまひてかへりしは、見るもおかしかりき、

〔東遊記後編三〕登龍　越中越後の海中、夏の日龍登るといふ甚多し、黑雲一村虛空より下り來れ